

1. 巻頭言

「神奈川大学工学研究」発刊にあたって

井川 学*

On the occasion of the beginning of “Technology Reports, Kanagawa University”

Manabu IGAWA*

1. 発刊の経緯

本年度より、神奈川大学工学研究所報と神奈川大学工学部報告を合併し、神奈川大学工学研究が発刊されることになりました。工学研究所は1975年5月に創設されましたが、1978年度に神奈川大学工学研究所報が創刊され、昨年度号39号まで毎年発行されてきました。一方、神奈川大学工学部報告は、最初は1962年度に神奈川大学工学部研究報告として創刊され、1997年度の36号より名称変更し昨年度号の55号まで、これも毎年発行されてきました。

今回の合併は、2016年初頭の林憲玉工学部長からの提案によるものです。すなわち、発行の母体は同一なのに複数の冊子を出すことの非合理性、近年の冊子の価値の低下等から、神奈川大学工学研究所報が工学部報告を吸収する形で合併したらどうかという提案でした。その後、工学研究所運営委員会で何回も討議を重ねるとともに、神奈川大学工学部報告の編集主体である工学部広報委員会でも議論を進めていただき、2016年の教授会で正式に決定されました。和文名や英文名についても議論を重ね、ここに掲げた名称に決定されました。

「神奈川大学工学研究」は、工学研究所が主体となって広報委員会の協力を得て組織される編集委員会の元で編纂されます。発刊を機に、B5からA4に装丁が変わり、表紙も新しくなります。号数は今回が1号ですが、神奈川大学工学研究所所報と神奈川大学工学部報告とが名称変更して継続するものとして取り扱われます。内容はこれまで二つの冊子に掲載されていた論文や記事がそのまま引きつがれ、一冊にまとめて掲載されることになり、読む人からすると便利になると思います。

今後の「神奈川大学工学研究」の発展にとって注意すべきこととして、大学で発刊する紀要で陥りがちな、二重投稿の問題があります。年度報告等であっても同じ内容を重複して工学研究誌上に載せてはならないことは当然です。また、既発表の内容を引用としてではなくあたかも新しい内容であるかのように掲載してはならないことも明らかです。学内誌への論文掲載は、それだけで終わるのなら問題はありませんが、多くの工学部構成員は掲載した研究報告をまとめて国際誌等にも投稿しようと考えてでしょう。その場合に、この「工学研究」に掲載した内容をさらに投稿するときの文章や図表は過剰な重複を避けるとともに引用元としての「工学研究」を明

記することが必要です。また、学会誌も掲載された論文は自分の論文であってもこれを「工学研究」に掲載するときは、必ず引用であることを明記する必要があります。これらの厳密な遵守はかなり気を使うことですので、共同研究報告等で他に投稿することを計画している箇所は簡潔に速報のような形で「工学研究」に掲載するといった工夫をしなければならないと思います。

この「工学研究」が、工学部の皆様にとって役に立つ雑誌であるとともに、学外の方には一目置かれるような評価の高い雑誌に育っていくことを期待したいと思います。

2. 神奈川大学の発展への期待

この冊子が発刊されることになった折もおり、2017年4月に神奈川大学はみなとみらい地区に新しいキャンパスを建設することを発表しました。新キャンパスとなるビルは地上21階建てで2021年4月に開設されます。本学開設の地に新たな拠点を作るわけであり、横浜における神奈川大学の立ち位置を確かなものしていくことになるでしょう。

みなとみらい地区のキャンパスは工学部も何らかの形で使うことになるでしょう。特に講演会等では、みなとみらいエクステンションセンター以上に、新キャンパスの利用頻度は高くなるでしょう。しかし、実験研究がみなとみらい地区でできるわけはありませんし、拠点は引き続き六角橋に置く、というのが大学の方針ですから、工学部は六角橋で引き続き研究していくことになります。また、平塚の理学部が六角橋に移転するなら、これを機に六角橋に理工の一大拠点を作りたいものです。工学研究所関連では、総合試験分析センターのような統一した研究所を作ったらどうでしょうか。現在、工学部と理学部でそれぞれ別個に高額機器を所有しており、中には同じ装置もあります。それぞれが終日稼働し続けているわけではないのですから、メンテナンスのことを考えても一緒にした方が合理的です。今後、文科省からの補助の減額も予想されるので、大学として計画的に高額機器の更新や新規購入を手当をすることを制度化する必要があります。その上で、地の利を活かしながら、新しい研究所組織として大きく飛躍することを切望します。

日本そして世界は、環境あるいは社会的に様々な問題を抱えています。このような時代の中で、例えば30年先の世界を見越して、本学が人々から高く評価される理工の研究拠点になるよう、努力していきたいものです。

*工学研究所長

President, Research Institute for Engineering, Kanagawa University